

---

## essais ころみ 2019年3月

---

2019年3月5日（火） 晴れ、陽ざし春

日の出が早くなった。陽ざしがどんどん明るくなる。デパ地下の和菓子各店に「春」や「花」の新作が並ぶ。自分でたのしむだけでなく、誰かと春を喜びたくなる。仕事で行く先にちよくちよく土産、春到来。

### 一 『モンテーニュ』から ① 一 時空を超えていきるもの

『エッセー』の著者「モンテーニュ」。その「モンテーニュ」の魂が乗りうつったかのような『モンテーニュ』（荒木昭太郎 中公新書 2000年）の著者。たしか堂島のジュンク堂で買った。

知人の勧めだったか、散歩がてらに店内を歩き回っていて気にとまったか。出版された翌年春頃には買って読んで、当時の手帳に2001年5月4日付で結び文からの抜粋をメモしている。

ずいぶん前、デスクワークしながら、すぐにこの本の出版年を知りたかったので、アマゾンを開いた。すると、カスタマーレビューの星がやけに低い。中身を読んでみた。

びっくり。わたしが、だからいい、と感じた点を、だからダメだ、と書いてある。モンテーニュに対する著者の熱さ、想い入れこそ、『モンテーニュ』の魅力だと感じるのに、真逆。レビューはアテにならないと思ってしまった。

『モンテーニュ』（副題に「初代エッセイストの問いかけ」）の「はじめに」の最初の部分、次のような文章がある。

ミッシェル・ド・モンテーニュは、フランス十六世紀の社会の変動、戦乱の断続のなかで、司法官、領主、市長として活動しながら、その現場での生活から直接得られた体験を、また手もとに置いた古代、当代の数おおくの書物からとり出した知識を、柔軟流麗な独自の文章に織りあげ、著作『エッセー』としえあとの続く者たちに手渡した。

そこには、その時代の様相の具体的な証言が、またそこに在る彼自身の生气にみちた見解が盛りこまれているとともに、世代を超えた人間全体のありようについての考察、生きる意味についての模索が、多種多様な論点によって示されている。

この「人間」という主題こそ、四百年ものへだたりを置いて存在するわれわれにも連結する基軸として提出されてあって、そこへわれわれ自身の新しい工夫、成果をさし加えるようにうながされるのだ。

「承認欲求」に翻弄されて、社会性を見失う人も現れる今の世。そこまでいなくても、何かと自分の評価を気にして、同調することが円滑なコミュニケーションを思い込んでいる人も少なくない。

「精神の糧を蓄えておきましょう」。数年前からよく言っている。時代は変わっても変わらない普遍的な精神を知り、心身にしみ込ませ、少々ことで自分を、「人間」を見失わないようにする。

そうでなければ、自分の「心の社会」が混沌として、收拾がつかず、いずれ、不健康になりかねない。そういう問題意識に共通してか、最近「超訳」をうたった『モンターニュ』が知らない著者で出版されていた。

書店で見つけて、へえーと思った。でも買わなかった。やはり「荒木昭太郎」だ。この3月はわたし自身の糧に新鮮な空気をおくる意味でも、この本をみかえして、エッセンスをとりだすしよう。

2019年3月12日（火） 曇り、不安定

沈丁花がきれいに咲いていた。春がすすみ、ラジオからは今年の「通り抜け」の日程が決まったという報。空気は今のところまだひんやりしているが、もうすぐ、あのふわっと暖かい風が流れる。春分も間近。

ー 『モンターニュ』から ② ー p57 ものを書くこと

4年前の2015年7月15日（水）の午後7時から堂島のジュンク堂大阪本店で、「若松英輔トークイベント」があった。当時日経の「プロムナード」を書いていた批評家。最近詩集が出たのを書店でみた。

日経で初めて「若松英輔」を知り、このトークイベントを見つけた時には焦った。さいわいまだ席があり、ほっとした。小さなスペース、すぐそばにご本人がいた。内輪のサロンという感じだった。

『〈書く〉は未来の自分のためのもの。〈書く〉、〈話す〉は魂の労働です』。“魂の労働…”、そう、そういうことなんだ…と合点がいった、なんとじっくり表せてくれるんだろう。この日の一番の印象がこれだった。

『モンターニュ』（荒木昭太郎 2000年）の57ページには、次のような文章がある。

モンターニュの「ものを書くこと」は「ある憂うつな気分」「孤独のもたらす不愉快な気分から出てきた」と、2章に掲げた文章で彼自身が言っている。

これはマイナス表現ではあるにせよ、自己をみつめ、自分のかかえる課題に対処するために書物を涉猟し、発生しかかっている想念を定着するために表現の工夫をおこなう、という知的活動の路線が成立したことを意味する。

数えてみれば『モンターニュ』を読んで、もう20年近くなる。それでもついこの間のことのように覚えている、モンターニュその人になじみ、共感し、まるでいま生きているように感じたことを。

公私ともに〈書く〉意義、効用を悟って久しい。仕事では特に、〈書く〉習慣がないという人には、〈書く〉ことをつよく勧めている。最近書き方の本がいくつか出ている。でも自分なりの方法を見つけることが肝心。

他の人のやり方が自分に合うとは限らない。個々人の創造性のあり方、思考の働き・働き方は異なるので、自分の感覚を頼りに、いろいろ試して、自分のスタイルをつくっていきましょう。

2019年3月15日（金） 晴れ

今週はまた震え上がった、明日にかけてまだ気温は低そう。ただし来週水曜は20度の予報。つめたい風もいまのうち。

ー 『モンテニユ』から ③ ー p92 不透明な対象

人の扱う対象のなかには、秘められたはっきり見抜けない部分があり、とりわけ人間の本性のなかには、訴えかけてこない、おもて立たない、場合によってはその持ち主にさえ気づかれていないさまざまな性質がある。

そしてそれらのものが、たまたま起こる偶発的な状況によってすがたを現し、目ざめるのだ。

このページの下欄にも引用し掲載したほど、自分を生きる上で、〈観察〉がどれほど貴重な営みか、ようやく実感してきた。自分を観察することは自ずと他を観察することにつながる。

仕事をとおして、自分の人生を拓こうとする人たちとたくさん出会う。わたし自身が良き観察者に恵まれわたしに開眼したように、人々にそうあらんと知力を総動員し、観察を試みる。

場合によってはご当人には親しみのないタスク・課業を勧め、求める。深く掘り下げて考えざるをない、書かざるをないうちに、徐々に際立ってくる自分の視点、想い、カタチ。

単発短時間の相談の場合に、独立した当初と今とで、わたしの言い方に変わった点の一つある。相手との問答をくり返し、最終的な助言を伝え終えて、付け加えるようになった一言。

「ひょっとすると、あなたの中にまだ表しきれていない想いや考え、ご自身ではあたり前すぎて、あえて口に出していないことがあるかもしれません。ですから今おうかがいした範囲でのことです」。

人間もまた宇宙とよく言われる。宇宙の物質が4%程度しかわかっていないと同じように、他者のことはほとんどわからないものだと思ふようになった。もちろんわたしのことも他者は簡単にはわからない。

皆たがいに「秘められたはっきり見抜けない部分があり」、だからおもしろい、人間社会は

2019年3月16日（土） す安定なお天気、午前7時ごろに雷と強い雨

この日はクレオ東館で「ビジネスセンス塾」。朝の雨も何とかあがり、これさいわいと出かけてみると、館玄関の木蓮が咲いていた！



2019年3月20日（水） 晴々

朝はひえたが、日中はコートなしでもOK。明日の春分を前に春の明るい陽ざしと晴れた空。明日はまた荒れ模様らしいが、今日のところは服装も春らしく、街を闊歩。

ー 『モンテーニュ』から ④ ー p111 哲学の妙味

自分を前面に仕事することは、その分フィードバックも直接受けるとのことだ。良いならよいなりに、悪いならわるいなりに、いろいろと考えさせられる。時に葛藤も付きものだが、そのおかげで得るものも多い。

“日常が哲学だ…”と思い至ったのもその一つ。比較的早い段階でそう感じた。仕事も暮らしも、人間関係なくして、事は進まない。会社員の退職理由の上位にいつも「人間関係」がくるもの。

独立当初はいろいろな人が興味をもって寄ってきたから、時に〈生活文化〉のずいぶん異なる人もいた。「おたがいさま」よりも「われ先に」の人には考えさせられた。

相手に対抗して、同じようになっではいけない。心のなかで自分を律しながら、“哲学は日常の中にあるんだなあ…”。その時のことは今もはっきりと印象にのこっている。

イスキアの「佐藤初女」さんは『今日と昨日と違う一日の差は〈気づき〉にある』と言った。毎日少しずつ気づいて、自分を拓いていくのだ。年を重ねてなお、また新しい認識を得るのだから、なんとも嬉しいこと。

『モンテーニュ』の111ページには次のような言葉が紹介されていた。言わんとすることが感覚的に伝わってくる。読む人それぞれの感覚に。

哲学は徳を目的としているのですが、それは、学校で言うように、きり立った、ごつごつの、近寄れないような山の頂上に突っ立っているものではありません。

徳に近づいてみた人は、その反対に、それが、ゆたかな、花のいちめん咲いた美しい台地であって、そこからすべてのものを見おろしている、と考えています。

しかしそれも、もしその道順を知っていれば、木陰になった、芝草の生えた、花の香の甘く漂う道筋をたどって、美しく、そして天界への坂があるいはそうであるような、なだらかでなめらかな坂をのぼって、そこへ行く着くことができるのです。

2019年3月26日（火） 曇り⇔晴れ

和歌山で桜が咲いたらしい。大阪は明日ぐらいか、気温が20度ぐらいになるというから。週末はまた寒の戻りの予報。まもなく4月、いよいよ新元号発表も秒読み。

ー 『モンテニュー』から ⑤ ー p158 自然が与えるもの

「堀田善衛」は『エッセー』を「（「人間」を見直す）試み」ととらえている。モンテニューのこの試みは、だから時空を超えて現代にいきる。まるで今の時代を生きている人が書いたもののように感じる。

懇意にしてもらっていた人生の大先輩によく尋ねたものだ。いまの心境や社会の捉え方などをあれこれ聞いた。いずれ年をかさねる自分の未来へのヒントに。面倒がらず、教えてくれた。

そういう人が身近にいればいいけど、いてもコミュニケーションは少ないよう。そこで本が恰好の媒体になるが、先日予備校の先生をしている人から聞いた話、「今の学生は新書は読めませんからね」。

だからなんでもマンガになるよう。それでも2/27付日経に読む学生は読んでいるという記事。この『モンテニュー』（荒木昭太郎 中公新書）も手にとってほしい。モンテニューの〈試み〉が励みになると思う。

読んでいると、不遜ながら、時々、わたしのことを書いてくれているように感じることもさへある。思考と散歩が一体になっていることや、次の箇所もまた、大いに肯く。

自然は、われわれに歩くための足をつけてくれたように、人生を送るための知恵をも与えてくれた。それは、哲学者たちの考え出したような、巧みな、強健な、華麗なものではなく、われわれにふさわしい、平易で、健康的なものだ。

ある時期、『風姿花伝』など、古典にあたるものを好んで読んだ。考えてみれば「失われた20年」の真っ只中の時だった。当時出ていた本よりも、古典を読んだ方がいいのではないかと感じていた。

時代は変わっても変わらない普遍的な価値。AI、ゲノム編集、等々、仕事と生活のあり方が、また一段を変わる世界。最近「美意識」、「教養」、「哲学」がビジネスにかけていわれだした。ひとつの時代の要請。

2019年3月29日（金） 晴れ

大阪も桜が咲き始めた。満開は来週中頃と思うが、あいにく明日あさってのお天気はぐずつくとか。といっても、出かけるつもりはない。よほど穴場へいかないと、最近は風情など感じられない。京都へも足が遠のく。目のつけば穴場があるので今年はそこへいくとしよう。



ー 『モンテーニュ』から(終)ー「自分でためしてみたまえ」

『モンテーニュ 初代エッセイストの問いかけ』（荒木昭太郎 中公新書2000年12月）についてメモしている日付は2001年5月4日。この日に読み終えて、ある種の高揚感の中で結びの文を書き写した。18年も前なのに、その時の気分も情景もよくおぼえている。

それからほとんど見返すことはなかったが、5年前の2014年に甦った。もって生まれた資質がそうさせるのか、ある節目でそれまでのすべてを総ざらいしたくなる。booklet『哲樂の中庭』がそうだったし、この時期は『自業のすすめ』としてまとめ始めていた。そこでふとまた手にしたのだった。

最初に読んだ時から13年、この本のもつ意味あいをぐっと重いものを感じるようになっていた。時間がすぎてみて、またその価値がわかる。これまでもそういうことが多々ある。年をかさねることは再発見の旅のようでもある。本当にたのしい。

194ページに著者が、こんな風書いている。

モンテーニュは、自分の位置づく場と時を、そこに存在する人間の想念と行動を、旧来のまた新規の事態の展開を、じっと見すえている。そして、予定か、必然か、偶然か、事のからみ合いか、たまたまそこにそうして位置づいていることのふしぎを、じっと想いみている。

それを彼はフランス語でsortで言いあらわした。「運、運命、天運、天命、境遇、身の上、成り行き」など、どの日本語をこれにあてようか。「抽選、くじ」という語義もあり、かりにこれをとるとすれば、われわれの存在は賽の目の結果ということになるが。

彼はこのとき、自分が現れ出た時空間をいとおしんで、それが辛苦、困難にみている、それをしのぎ、のりこえていく勇気を湧きおこしている。そして、そのことが自分たちの人間としての実質を鍛え、深めるように期待するのだ。この意欲、覚悟がテクストの地の奥から光沢、風合いのようにたちおぼる。

これは、人間としてどう生きるかに想いをこらすメッセージとして発信されており、受け手が同じ想いを抱いて迎えに出るとき、同調の回路ができあがって、受信が可能となるのだ。このときはじめて、激励が波動となって走って応答を呼ぶ。

これこそ伝達のアクションであり、言は伝えられ置きかえられて、彼我共通の言となろう。このような、時を超えた特別の出会いの場をつくり出す力を、モンテーニュの文章は内にゆたかにはらんでいると思われる。

そして214ページ、本編むすびに著者もうながす。

受け手は自分の弁別と聴取の特質を存分に高めて、真実、率直、明智、晴朗をたたえたメッセージを受けとれば幸せだ。そのように思い知る者に、モンテーニュは語りかける、「自分でためしてみたまえ」 Essayez vous-meme と。